

まっくろけ節について

田 口 親

「まっくろけ節」は明治の後期から二、三年流行したものとされている。当時歌舞伎座の「助六」の上演中に、通人^{つうじん}に扮装した役者（註記 中村翫太郎？）が引込みの時に、この歌を口ずさんで喝采を博したことがあったと伝えられている。そしてこの歌は花柳界に、世の中に広まっていった。今でも時々唄われることがあるが、

もともとこの歌は明治二十年頃にすでに「べっぴんさん、おまえのおとしはいくつだね、問われてあそこに手をやれば、年にも似合はず、まっくろけのけ」とあったのを啞蟬坊が参考にして歌作したといわれる。

啞蟬坊以前にこの歌があったことについては、今の所

明治四十三年五月十二日発行の「新曲ハーモニカ」（野田桂華著、一書堂発行）に「べっぴんさん、おまえのおとしは十さんさいで、きいて〇〇〇へてをあてりや、おとしにあらぬ、まっくろけのけ」とのっているので、啞蟬坊以前にあったことは確かであると思う。

「新流行まっくろけ節」は、早稲田大学図書館の特別書庫に収書されている「明治大正流行歌類集」〔411・4700（33）〕の中に入っているもので、原物をそのまま記して見よう。



はしがき

地球は明暗の晝夜から、一日々々を織成して行く。蠟燭の灯にも光明と暗黒の部分がある。人の目玉も白と黒から組織されて居る。薩摩潟に火を噴く、人間は焼土に埋没する、米食ふ人の子は、眞黒な松葉餅を作る空翔ける飛行機が文明の誇であると共に暗黒な土中に土鼠の如く掘る鑛業も誇だ。夜を晝の舞蹈場裡、女菩薩が綺羅を飾つて狂ふ時、多数の餓鬼は活地獄で塵芥を飾る。人は天使の美と成つて行く、人は熊の眞黒と成つて行く、眞黒？ 眞黒？ 眞黒は到底地の眞相で人間の眞相だ。眞黒節は此の眞黒世界から生れた眞黒な目玉の對象である

大掃除の日に眞黒な手で

啞 蟬 坊 識

まっくろけ節について

まっくろけ節

作 坊 蟬 啞 田 添
行 流 新

7	6	2	5	5	5	6	6	6	5	5	6	7			
6	7	2	7	6	3	6	5	3	2	2	2	2	2	2	
2	2	2	7	2	3	3	2	2	7	6	7	7	7	6	5
3	2	2	5	5	5	6	7	6	2	5	5	5	6		

まっくろけ節

蟬 啞 坊 作 歌

- 箱根山。昔は背で越す籠で越す 今じや束の間に汽車で越す 煙りでトンネルは マツクロケノケ
- 櫻島。薩摩の國の櫻島 煙り吐いて火を噴いて破裂し
おこりだ
- 十里四方が マツクロケノケ
米で鳴る。陸奥^{むつ}に生れて食へぬとは 嘘^{うそ}のようだが来て

見やれ　いり蕁松葉餅　マツクロケノケ

○ 雨が漏る。雨が漏る漏る美術館　汚點^{しみ}が畫になる其の汚點が　職工の涙よ　マツクロケノケ

○ 金ほしや。お金ほしやの空想の　果てを足尾の銅山にカネを掘る掘る　マツクロケノケ

○ 不景氣を。こぼしながらも身を飾り　質屋の奉公する娘さん　明日また工場で　マツクロケノケ

○ ちよいと見れば。歌舞の菩薩か辨天か　檔^{しかげ}姿にだまされて　朝見りやおでこで　マツクロケノケ

○ ふられ客。ねぼけ眼で出て見れば　アホウ／＼と鳴いて居る　屋根の鳥が　マツクロケノケ

○ 爪^{つま}彈の。消へて聞へて又消へて　消へて聞へて又消へる邪魔な板塀　マツクロケノケ

○ 琴の音を。目で聞く黒塀の節穴や　人が通りや止めて又覗く　出齒の目のふち　マツクロケノケ

○ 窓と窓。見合す顔と顔浪なんか　汽車摺れ違ふ山科や残るは煙りか　マツクロケノケ

○ 月淡き。熱海の濱の砂を踏み　迷ふ宮子と貫一の　曇る心は　マツクロケノケ

○ 浦里が。忍び泣すりやみどりまで　もらひ泣きする明烏

○ 庭に降る雪　マツシロケノケ

○ 先妻の。子供を見ると目が光る　^{たばこ}莨すば／＼立て膝の後妻が腹こそ　マツクロケノケ

○ 柳葉の。下にある／＼何がある　意氣な小意氣な女下駄川岸の人立ち　マツクロケノケ

○ 世を忍ぶ。障子に映る影法師　^{もも}粹を利かして燈火を吹き消す戀風　マツクロケノケ

○ 朧月。咲いた櫻の其の下の　ベンチに並ぶ影二つ　何を語るやら　マツクロケノケ

○ 煙が出る。煙が出る出る煙が出る　お嬢さんの袂から煙が出る　お芋の焼過ぎ　マツクロケノケ

○ おさんどん。そこでお前は何するの　お芋煮ながら摘み食　お顔に鍋炭　マツクロケノケ

○ 雁^{かり}が飛ぶ。あとになり先になり雁が飛ぶ　あの森越へて山越へて　何處へ行やら　マツクロケノケ

○ 闇の夜に。マントにコートの二人連れ　誰か來たとて手をはなし　よく見りや郵便箱　マツクロケノケ

○ あんまさん。杖を便りの流し笛　犬に躓^{つまず}いて吠られて

○ むき出す目の玉 マツシロケノケ
鰐わに口で。アバタでスガ目でしやくし面 それでおしやれ

○ のお嬢さん 磨いてもく マツクロケノケ

○ 年の瀬や。明日待たるゝ寶舟 其角と源吾は橋の上 霜

で欄干が マツシロケノケ

○ とぼく。と。山崎街道を與市兵衛 あとから出て来る定

九郎 提灯バツサリ マツクロケノケ

○ 牛若が。天狗相手に鞍馬山 獨ひとり學んだ雲がくれ 烏天

狗は マツクロケノケ

○ 戀しさに。松原越へて川越へて 菜の花一里黄昏るゝ

君が在所は マツクロケノケ

○ ぬらくらの。主人が酒飲んで赤くなりや 奥さんヒステ

リーで青くなる お三は臺所 マツクロケノケ

○ 鼻の下。長の居續けたとても モテる亭主じやあるま

いし 女房焼いてく マツクロケノケ

○ 改める。兜も星の鶴が岡 花の姿に師直もろのちが 迷ふ眼まなこは

マツクロケノケ

○ 桃の井の。心を汲んで本藏が まツこの通りと切り落す

松の小枝が マツクロケノケ

まつくろけ節について

○ 判官が。勘忍袋の緒が切れて 師直待つたと切りつけり
や みけんの血汐が マツクロケノケ

○ しつぱりと。積る話を奥ざしき さしつさくれつ酒さけご

とに 解ける襦子の帶 マツクロケノケ

○ 父君を。尋ね尋ねて石童が 登るお山の夕まぐれ 麓の

學文路宿まなぶんじやく マツクロケノケ

○ 自働車の。後を見送る田吾作の ふくれたふところに目

をつける スリの目の玉 マツクロケノケ

○ 祝言の。謠曲うたふ俄に浪荒れて 産婆を呼べのお目出たさ

花嫁の乳首が マツクロケノケ

○ 三日月の。頃より待ちし今日の月 月が昇れば松の影

障子に映って マツクロケノケ

○ 鹽原を。あとに多助が飼ひ馴れし 馬に別れて江戸へ出

て 炭屋を始めりや マツクロケノケ

○ 勘平が。ねらいさだめた二ツ玉 たしかに手ごたへかけ

よりて よく見りや旅人 マツクロケノケ

○ 丸腰の。町人ながらも魂は 武士に劣らぬ天川あまがはや 下に

長持 マツクロケノケ

○ 討入や。山よ川よの四十七士 師直もろのちいづこと尋ねれば

隠れた炭部屋 マツクロケノケ

○ 勇ましや。本望遂げて引あぐる 譽れ高輪泉岳寺 雪の

曙 マツシロケノケ

大正三年三月廿五日印刷
大正三年三月廿八日發行

著 者 啞 蟬 坊

東京市下谷區仲待町一丁目六番地
發行 者 關 由 藏

東京市淺草區南元町二十四番地

印刷 兼 小 宮 定 吉
印刷 所

奥付には御覽の通り大正三年三月廿八日發行となつて
いるので、これが啞蟬坊の歌作の「まっくろけ節」の最
初の頃のものと考えられる。ところで表紙の啞、蟬、坊、巻
頭の蟬、啞、坊とあるのは一寸御愛嬌である。さて「はしが
き」であるが、桜島の噴火と東北の凶作と地震のことが
書かれているむきがあるので「大掃除の日に真黒な手
で」というのは「まっくろ」なことに氣をつかった啞蟬
坊の考えであらうか。というのは桜島の噴火を北海道の

凶作、東北地方の凶作と地震は大正三年の出来事である
からである。大正三年は私の生れた年になるから約七十
年前のことである。大正二年から大正三年にかけて、北
海道と東北地方は凶作であつた。そして三年の三月十五
日には秋田県に大地震が起り被害甚大であつた。三年一
月十二日には桜島の大噴火があり、死者多数を出したの
である。添田啞蟬坊は大正に入ってから世相を暗い真
黒なものとして、この歌を作つたのであらう。啞蟬坊は
明治五年（一八七二）十一月二十五日神奈川縣大磯で生
れている。明治二十四年、十九才の時にはすでに演歌師
になつていたのでから明治時代を通り、大正三年には四
十二才の働き盛りであつたのである。昭和十九年（一九
四四）二月八日に七十二才で没している。したがって明
治・大正時の色々な事件を演歌師の目で見えてきたのであ
る。彼の社会思想的な目は、庶民的・下層社会のどん
底の生活者の立場から世の中を見ていたのである。自由
民権をうたつていた日本の政治もほとんどと帝国主義的
な方向に流れていったのである。言論の自由もなくな

り、学問の自由もなくなっていった。日清・日露の戦に勝利したというものの、日露講和条約は日本国民にとっては不満のものであったことから、日比谷の焼打ち事件がおこる。また田中正造の鉱毒問題事件は大正年間まで続く事件であった。そして啞蟬坊の予言した様に大正三年だけ見ても色々な事件がおこっている。一月二十三日にはシーメンス事件、三月二十四日には桂内閣をうけついでばかりの山本内閣が総辞職、六月二十八日には堯皇太子の暗殺（サラエボ事件）、七月二十八日には世界大戦がはじまり、日本は八月二十三日ドイツに対し宣戦布告している。こんな時代にこの歌が唄われたのである。

次に「新流行まっくらけ節」にのっていない歌詞を書きつらねておくことにする。

「大正芸者現代流行新歌集」（添田啞蟬坊著・大正八年五月十五日発行・矢野博信書房刊・頁一九八）

○ カンカンと お金を延ばす鍛冶屋さん いくら延ばしても金持てず 朝から晩まで マツクロケノケ

○ 進みゆく 文明の光の瓦斯電燈 夜を晝にする工夫さん

まっくらけ節について

お前はいつでも マツクロケノケ

○ 労働者 下司よ下郎と馬鹿にする それが開化か文明か

労働者が無けりや世は マツクロケノケ

○ 裏木戸や 合圖の礫がちよそれて ぱっと香に立つ闇の

梅 窓は何處やら マツクロケノケ

「俗曲全集」（日本音曲全集の中）（中内麿二・田村西男編

・昭和四年六月三十日改裝五版発行・誠文堂刊・頁三〇三）

○ 山崎の 街道とぼく／＼與市兵衛 跡から出て来る定九郎

提灯ばつさり マツクロケノケ

「世界音楽全集 第十九卷」（明治・大正・昭和流行歌

曲集）（堀内敬三・町田嘉章編・昭和六年四月十五日発行・春

秋社刊・頁百十六）

○ しをばらの すみやのたすけがいえてして うまとわか

れのそのときにや なみだでおかをがまっくらけのけ

オヤまっくらけのけ

「流行歌百年史」（藤澤衛彦著・昭和二十六年十月十五日

発行・第一出版刊・頁二六三）

○ 四疊半 三味の爪弾音もやんで ひそひそ話も今の間や

電氣が消へたか マツクロケノケ

演歌師・櫻井俊雄氏から直接教えられた歌詞、

○ 札幌の ビール會社のエンツツは 太くて長くて大きく
て 吹き出す煙は マツクロケノケ

一応普通の歌は、この位の所が私の蒐集は限度である
が、未だ未だあるのかも知れない。

こうした歌には良く替え歌（パレウたとか春歌とかいわ
れるもの）が出来てくる。ことのついでに紹介すると、

○ 初戀の二人とぼく／＼ランデーヴー だまつて並んで影法
師 頬べたばかり マツカツカのカ

○ 新婚のさしつさされつ水入らず 妻はちら／＼長襦袢
心射るよな マツカツカのカ

○ 嫌怠氣（期？） 知らぬ顔して浮氣して 家じや互いに
胸の中 舌をペロリン マツカツカのカ

○ おじょうさん おひざくずして かるたとり ひざとひ
ざとのあいだから ちらりと見えます まつくろけのけ

○ おじょうさん 奥で晝寝はよいけれど 寝返りうつた
そのし（ひ？）ようし ちらりと見えます まつくろけの
け

○ 夕立ちに とびこむ軒の雨やどり とりもつ雷あれこわ

い あとはなんだか マツクロケノケ

○ 小夜ふけて どこで飲んだか婆藝者 足元ちどりで 呂
律まわらぬお顔が マツクロケノケ

○ ミニスカート 階段のぼるその下を 今ぢや男が皆のぞ
く ちらりと見えます マツクロケノケ

○ さくら餅 床におっこち轉げれば あわてて拾おうと踏
みつけり とびだすあんこは マツクロケノケ

○ ペンキ屋が 看板ぬっているその時に はしごはずれて
落っこちて バケツの中で マツクロケノケ

これらの歌詞も私の見ることが出来たほんの一部なの
であろう。演歌師等が、その時々いろいろな場所で、思
い思いに作詞するのであるから、さまざまな歌詞が出来
上って行くのであろう。また楽譜の方も色々なのがあ
る。

演歌が政治的な歌から始まったことから、社会風刺・
教育的なもの・事件を取上げたものがあるので、一つ一
つ味合って見ると、その時代の世相が目の前に浮かんで
来る様な気がする。

まつくろけ節について

まつくろけおし

2/4 $\frac{0}{7}\frac{0}{7}\frac{0}{7}$ $\frac{0}{7}\frac{5}{5}$ | $\frac{0}{7}\frac{0}{5}$ | $\frac{5}{5}\frac{5}{5}$ $\frac{5}{5}\frac{5}{5}$ | $\frac{5}{5}\frac{5}{5}$ $\frac{5}{5}\frac{5}{5}$ | $\frac{5}{5}\frac{5}{5}$ $\frac{4}{3}$ | $\frac{4}{0}$ | $\frac{2}{5}\frac{5}{5}\frac{5}{5}$ | $\frac{3}{6}\frac{6}{6}\frac{6}{6}$ |
 べつび んさ ん か まへー の かどし は 十さん で きいて 〇〇〇へ
 | $\frac{4}{7}\frac{7}{7}$ $\frac{7}{5}$ | $\frac{5}{0}$ | $\frac{5}{5}\frac{4}{4}$ $\frac{3}{4}$ | $\frac{3}{4}$ $\frac{2}{4}$ | $\frac{2}{5}$ $\frac{5}{5}$ | $\frac{5}{0}$ | $\frac{2}{5}\frac{3}{3}\frac{3}{3}$ | $\frac{3}{0}$ ||
 てを あて りや を ど しに にあ はぬ まつくろけのけ

新曲ハーモニカ（音曲全書

桂華著^{東京}一書堂発行^{大阪}

明治43年5月12日発行 頁678)

まつくろけ節

2/4 $\frac{4}{3}\frac{6}{2}\frac{2}{2}$ | $\frac{2}{2}$ $\frac{2}{2}$ $\frac{3}{3}$ | $\frac{0}{0}$ $\frac{3}{3}$ $\frac{3}{3}$ | $\frac{2}{2}\frac{2}{2}\frac{3}{0}$ |
 おやまつく るけの けはこ れやまー
 | $\frac{3}{4}\frac{4}{4}\frac{4}{4}$ | $\frac{4}{6}\frac{6}{4}\frac{3}{3}$ | $\frac{2}{3}\frac{2}{2}\frac{7}{7}$ | $\frac{6}{0}$ $\frac{0}{0}$ |
 はちりの やまみち かごでこ す
 | $\frac{4}{6}\frac{6}{6}\frac{6}{6}$ | $\frac{6}{6}\frac{6}{6}\frac{6}{6}$ | $\frac{4}{6}\frac{6}{6}\frac{6}{6}$ | $\frac{7}{6}\frac{6}{4}\frac{3}{3}$ |
 いまはー べんりな きしやで こすー
 | $\frac{4}{6}\frac{6}{4}\frac{4}{4}$ | $\frac{3}{2}\frac{7}{6}$ | $\frac{6}{2}\frac{2}{2}\frac{2}{2}$ | $\frac{3}{0}$ $\frac{0}{0}$ |
 さんれる でりやをはな がまつくろけの け

ヴァイオリンアルバム

和洋音楽普及会編

東京・三友会出版部発行

大正九年四月二十一日再版 頁十五

同じ所で「大正琴独案内」を出版、同じ譜がのっている。

[大正三年頃]

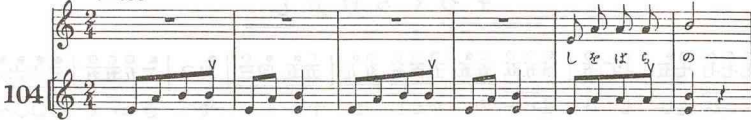
三下り陰旋音階

まっくろけ節

町田嘉章採譜



宮 ♩=108



堀内敬三・町田嘉章編 世界音楽全集十九巻 明治・大正・昭和・「流行歌曲集 昭和6年4月15日 頁116」

まっくろけのけ

野ばら社編・同刊
思い出の愛唱歌集
昭和三十一年七月五日改訂
頁百十四



まっくろけのけ

添田啞蟬坊 作詞
作曲

まっくろけ節について

7 6 6 | 7. 0 | 0 i i i | i 3 i 7 |
はこねやま ひかしやせてこす

6 7 6 4 | 3. 0 | i 3 3 3 | 4 3 i 7 |
かごでこす いーまじゃゆめのま

i 3 3 3 | 3 4 3 i 7 | 0 i 3 i i | 7 6 4 3 |
きしでこす----- けむりで トンネル

3 6 6 6 6 | 7 i 7 | 3 6 6 6 6 | 7. 0 ||
まっくろけの け オヤ まっくろけの け

野ばら社編・同刊
思ひ出の愛唱歌集
昭和三十八年六月十日刊
頁二百七

マックロ節

啞蟬坊詞・曲

♩=80

さくらしま さつまの ーく にの

さくらしま りかりはいて ひをふいて

おこりだし ー ーじゅうり しほうが

マクロケノ ケ (オヤ マクロケノ ケ)

添田知道著 演歌の明治大正史 岩波書店刊
昭和三十八年十月二十一日第一刷発行 頁百六十一

まっくろ節

添田 監 作詞・作曲

♩ = 92



1. はこねやま ー むかしやせでこすー うまでこす いまじゃゆめの ま
2. さくらじま ー さつまのーくにのーさくらじま けむりかてひをふいて
3. あんまさん ー つえをたより にー なかしぶえ いぬにつまづいて
4. やまざきの ー かいどうとほとほー よいちべえ あとからでてくる

きしゃでこす ー けむりでトンネルは
おこりだし ー じゅうりしぼうが まるけのけ オヤ まっくろけのけ
ほえられて ー むきだ すめだまが
さ だく ろう ー ちようちんば ー っさり

長田 曉二 著 流行歌謡曲集 — 〈明治百年記念・流行歌の変遷〉 —
全音楽譜出版社刊 昭和47年 7月10日刊 頁89

まっくろけ節

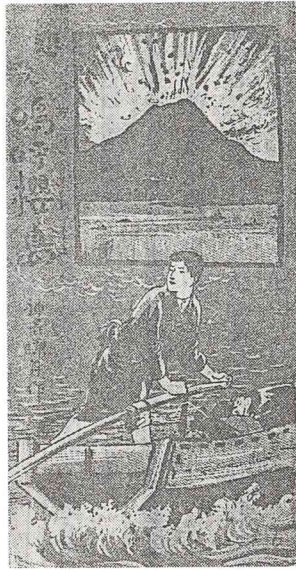
後藤 紫雲 作詞・曲
添田 監 作詞・作曲



7 7 6 6 17 0 10 1 1 1 1 3 1 7 1
はこねや ま むかしやせでこす
6 7 6 4 13 0 1 3 3 3 14 3 1 7 1
かごでこす いーまじゃゆめのま
1 3 3 3 13 4 3 1 7 10 1 3 1 1 17 6 4 3 1
きしゃでこす ー ー けむりで トンネル
3 6 6 6 17 1 7 13 6 6 6 6 17 0 11
まっくろけの け オヤ まっくろけの け

野ばら社編・同刊
思い出の愛唱歌
昭和四十九年七月十日刊
頁百五十

丁度同じ時に、啞蟬坊とはライバルである神長瞭月（バイオリン演歌の創始者）著の「悲歌―嗚呼桜島」があるので参考までのせることにしよう。これは早稲田大学の特別書庫に収書されている「新流行歌類纂」(411・466(6))の中にある。この歌は啞蟬坊のものとは大分におもむきも感じも異なるものである。



はしがき

櫻島大爆發の悲報をきゝて直に本詩をものすさらでもつた
なき筆の餘りの驚きにいやつたなきはしり書き讀者それ其
心をよめ

一月十五日

瞭月誌

まっくらけ節について

島 櫻 呼 鳴 悲歌

神長瞭月作

へ調 $\frac{3}{4}$ 悲哀の域を以て

6_6	7_6_7	3_4	3_0	4_3	6_4	3_0
4_3	6_7	3_1	7_0	1_7_3	1_7	6_0
7_7	7_7	1_7	6_0	7_6	4_6	3_0
3_4	5_5	4_3	1_7	6_7_1	3_1	7_1
7_6_0						

▽遂に大噴火！今午前十時卅分鹿児島湾内の櫻島遂に大爆發をなし火焰黒煙天に沖し光景頗る惨憺を極め避難者の狼狽する状恰も戦場の如し
▽櫻島島民は全滅か？爆發は島の前面及び背面の二箇所にして濛々たる黒煙の中より大紅蓮の火光閃々として天に沖し其光景頗る凄惨を極め島民の死傷算なき模様なるも差當り救済の途なく鹿児島全市は降灰の爲に白燼する計りなれば市民孰れも生色なし（大正三年一月十三日新紙所載）

悲
歌 嗚呼櫻島

神長瞭月作歌

○大和心を如何にぞと 問はゞ答へん山櫻 開かん春もまの
あたり 哀れ悲しや櫻島

○見るだにせまき里ながら 幾千代かけておくつきの それ
とたのみし故郷ふるさとぞ などあくがれのなからめや

○高嶺の櫻谷の百合 鎮守の森よ沖の島 梢の小鳥野邊の草
きては小川のせゝらぎや

○父母は日毎のいつくしみ 妹美しく兄もよし 昨日めとり
し新妻の 心やさしや髪形

○軒の雀も千代となき 八千代ことほく朝ぼらけ 如何なる
罪の報ひにぞ にはかに起る百雷の

○響ひびのそれか否なざるか あなよと見ればこは如何に 眠れる
如き西が峯は 今や紅蓮の火と化しぬ

○手足戦き胸おどり たゆとふひまもせんすべも 見よ盤石
のこゝかしこ 溶けて落つなる其様よ

○天柱碎け地軸さけ 地獄の様をまのあたり 婦をみは狂ひ子は

叫ぶ あな恐ろしの有様よ

○兎やせん角やせんものと 心斗こころはりははやれども 身は傷つ
きて今は早や 起たちさへ敢へぬ悲しさよ

○斯くては果てじと起ち出でゝ まろびつふしつ西東 父よ
と呼べど答へなく 母よとよべど人はなし

○妻いまとよ妹いもよいづくぞと 泣けど叫べど影もなく 惡魔の火焰ほのお
限なくも 包み圍める様を看よ

○又も轟く百雷の ひゞきに和なして物凄く 惡魔の光夜叉の
聲 大地を碎く岩の雨

○他ひとやいかにと打見れば 親は子をよび子は親に 離れ／＼
て敢なくも あななきがらの又一つ

○父上いづこ母じや人 如何にますらん如何にぞと 見れば
哀れや事止みぬ 無念の口唇くちびるかみつゝも

○事されたるか父母の君 返させ給へ戻せよと 呼べと叫べ
どなきがらの たゞに冷しおん顔かほ

○三度とぶろく物音に 見ればこはまた物すごや 高嶺は碎
け百丈の 火柱どつと天に立つ

○胸はあまりのおのゝきに 涙もつきて父母の なきがら肩
にまろびつゝ 海の邊へ近くはせよりて

○誰が乗りすてし小舟かも 今の我身に知るよしも 梶取る

ひまもつかのまに 向ふ鹿兒島かこの鳥

○いづれはからき我命 父にはさられ母は逝き 昨日榮えあ

る新妻も 今日ほうたてし白骨の

○泣けどなげけど詮もなや 海路はるかに眺むれば 噫我故

郷一面の 猛火に閉ぢぬ噫さらば

○さらばよさらば故郷よ 年月なれし汝はしも 今亡ぶかよ

我も又 同じ運命の天の下

○梢にさへづる鳥の聲 高ねを落つる瀧の音 男波女波の十

重廿重 樂のしらべの櫻島

○春はふもとの櫻花 夏は汀の月衣 秋は高嶺の夕紅葉 冬

は小島の雪げしき

○昨日の榮え夢と消え 今日を訪ぬる人もなく たゞ黒けむ

りとこしへに 昔の春を語るらむ

悲
歌 嗚呼櫻島〔終〕

まつくろけ節について

視察急派

水野内務次官談

誠に意外な大事變で御同様心痛に堪へません當省では鹿兒島縣知事から報告の來る度毎に一々鷹司侍從長の手を経て畏き邊りへ奏上致して居りますが陛下にも深く御軫念あらせられると承はり恐懼に堪えません今日は内閣會議で大臣はその方へ出席して居りますが海軍省と交渉して軍艦派遣の都合に致しました現狀視察に關しては本日警保局から河原田書記官を地方局から矢田内務屬を選んで午後三時半鹿兒島に急行させる事になりましたた委細は報告にて御承知ありたし

喪然泣く事を忘れし避難民の直話

十三日午前五時予は吉松に在り櫻島住民たりし河村多吉の避難し來るに會し詳さに爆發當時の慘狀を聴取するを得たり其談に曰く爆發當時の感と云ふも予は殆ど明瞭に記憶せず俄然たる大音響に驚愕して戸外に出でたる時先づ眼中に映じたるは目を眩せん計りなる白熱の火焰と呼吸を杜絶さるゝ硫黃の臭氣なりき

次で足部の熱さを感じたるが實に

地上一面は熱灰溶岩の狼藉たる有様

なりしなり予は狼狽の極直に走りて海岸に出て恰も近隣の人二三の漕ぎ出さんとしつゝありたる舟に飛移り辛うじて鹿兒島に着せるが海上より見たる櫻島の新噴火口は赤水の上部にして地底より轟き來る氣味惡き劇震は噴火口に至りて高き數十丈の大火焰と化し方

二三間にも餘る可き大岩石の空中に噴

出する狀到底現世の光景に非ず赤く灼熱したる石片は紛々として海中に落ち其都度海水は沸然たる白煙を上げたり噴火口下なる横山村

櫻島村の全部に亘りて延長數丁の火災

起り折柄の軟風に靡ける黃煙黑煙は全島の空を蔽ひ容易に散せず午前十時ならんか二度目大爆發起ると同時に黑煙は火光に和して全島影を沒したり住民は大部分船にて避難せんとせしも限りある船は盡き逃げ遅れたる者は道に倒れて死傷算を亂し

纔に身を以て逃れたる者も多少の負傷

せざる者は殆ど稀なり鹿兒島市に入れば市内家屋の軒庇等は暗黒色の降灰に蔽はれ濛々たる白煙を起し居れり予は本願寺に一

時身を寄せたるも焼石等の落下するもの多く危険なるより更に走りて停車場より貨車に乗り當地に來れり鹿兒島市民は續々家を棄てゝ

市外に逃れ全市は廢趾の如く轉た寂寞たるを見たり予は妻と二人のみなるも妻の行衛を知らずとて眩然として泣けり猶通信機關杜絶し汽車故障を生じたる事故鹿兒島は目下孤立の狀態に在り

艦艇より見たる櫻島の光景

鹿兒島に向へる利根以下各艦艇は何れも十三日午後到着せるが櫻島を去る十哩の距離より見たる慘狀を報じて曰く全島濛濛たる黑煙に包まれ焰々たる火光一萬數千尺の高さに噴出しつゝあり

大正三年一月二十三日印刷

大正三年一月二十六日發行

著者
神長
作
一丁目六番地
藏

發行
東京市下谷區仲徒町
關
小宮
定
吉

印刷者兼印刷所

といったものである。

桜島の噴火については「大正三年桜島噴火記事」(19)

1583) 九州鉄道管理局編纂・大正三年七月三十日発行がある。

この本には詳しく噴火の様子が書れている。それによると歴史的には、大正三年の噴火は三十回目で、最初は天平宝字八年十二月である。そして噴火は一月十二日午前十時五分に始まり、三月廿八日に一応終了したことになる。二月四日県警察調で罹災民は総計一四、三二五名となっている。庶民は演歌によってやさしく事件を知らされたのである。いわば歌の瓦版ともいえるであらう。

【註記】

中村翫太郎シラタロウ（本名は中村久太郎）は屋号が成駒屋、俳名翫竹である。嘉永六年（一八五三年）四月の生れで大正六年（一九一七年）三月十四日六十五歳でこの世を去った。翫太郎は「助六」の里暁の役を上手に演じる役者であった。翫太郎の資料があるので次にあげておくことにしよう。（58頁凸版）

日本俳優鑑 演藝畫報社発行 明治四十三年刊

まっくらけ節について

演藝畫報 大正二年十一月号 「大正役者芸風記」 椋右衛門

著 頁十二〜十三

中村翫太郎 何んとなし好きな役者である、何もせずに黙って舞臺に出てゐても面白味のある役者である。花四天や大勢出る仲間などで、やくざもくざと一緒になつて出ても、目につく役者である。顔が古いといふばかりでない、顔が翫太郎といふばかりで無い、何をやつても體がチャンとコツにはまつて、立派に舞臺の人になつてゐるからである。

此の人や蟹十郎のやうな役者は、追々と見られなくなつて行く。それだけでも歌舞伎劇の衰微といふことが感じられると同時に、此ういふ役者がなつかしいやうな氣がする歌舞伎劇では、此ういふ質の役者の活動に依つて、何程芝居が面白く見られてゐたか知れないのだ。

翫太郎を見ると、何時も喜知六を思出す。喜知六が死んでから、もう餘程になるが、その時分には尙だ喜知六も翫太郎もナカ／＼働いてゐたものだ。自分等の役どころのものは別として、二人で「夕霧伊左衛門」などといふ振つたものをやつたことがあつたやうに覺えてゐる。喜知六が由良之助の駆付け

(愛
粧品用)

▲▲白
石香水

▲▲白
粉、白助美人
酸水、色々王

▲▲化粧水、
粉磨、たつた

▲▲洗磨、
粉、たつた

味 趣

(煙飲)(食新)(雜)

(物聞誌)

草物物聞誌

白、白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

日本酒一升位

中類央

講談もの

日本酒一升位

白梅

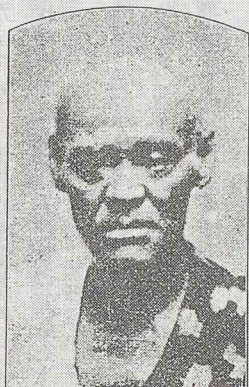
日本酒一升位

中類央

講談もの

郎太翫村中 目代二

(等五級等札鑑)



中村翫太郎

歌舞伎座、
東京座、
蓬萊座、
出勤

東京市京橋區木挽町三丁目三番地
本名 中村久太郎
屋號 成駒屋 俳名 翫竹

私どもには別に経歴談と申して、御咄をする様なことは有りませんが、一體私は嘉永六年四月生れ、父は赤坂で三十俵取の役人で清水清兵衛と申したもので、私は七歳の時先代中村芝翫さんの弟子となりまして佐野松とよび十三歳の時駒六と改名し二十九歳の時駒六改め二代目翫太郎となつたのです。翫太郎になつてからは京阪地を到る所歩きました。此時分の艱難苦勞はとてもお話にはなりませんや。今の俳優の中で上から蛇の隨る所や雪の中を歩いて、青天井の莖つ張の小屋で見物が雨の時は傘をさして觀て居るやうな酷い所で芝居をするのを知て居る者は八百藏さん、故秀調さんに私しくらゐの者でしやうと一杯機嫌の翫太郎は白髪頭を振り立て、爾かく談した。翫太郎君の妻君はお花(文久二年生)と云ひ二十年前に合巻になつた人の中愛嬌ものである。

「日本俳優鑑」(明治43年刊) 43頁

で、水ッ涕を手の甲で拭いて見せたのも確か其の時であつたと思ふ。翫太郎のことを何う此ういふ段になると、何うも謂ふことが勢懷古的にならざるを得ない。

近頃ではもう翫太郎は、歌舞伎座でも居ても居なくとも可いやうな役者になされてゐる。翫太郎の役者が悪いのではない、時世の故である。時世が翫太郎を働かせるやうな芝居をしなくなつたのだ。自分の見たうちでは、近年些々と振つて見せたのは、「切られ與三」の時の番頭藤八などであらう。その他は大概些々顔を出すといふだけだと謂つても可いだらう。そのうちで眼に残つてゐるのは、「出雲のお國」の時に蟹十郎團八と三人で踊つた役者位のものである。

小芝居にも近頃餘り顔を見せぬやうである。だが因果物師の小兵衛や「大藏卿」の勘解由なぞを見ると、好い悪いはさて置き、翫太郎には翫太郎獨特の味があるだけでも面白く見て居られる。

翫太郎は道化以外に、端敵にも一種の老役にも腕に覺のある人である。其の顔なり、其の舞臺ぶり、只舞臺に出てゐるだけで面白味のある人だから、別に働ける役をしなくとも可いやうなものであるが、それでも偶時には翫太郎の役らしい役も見

いと思ふ。此の種の役者として最後に残つた一人として、此の老優を珍重する。翫太郎は役者其物にひねつた面白味のある役者である。

演藝畫報 大正三年一月号 「役者の顔」牛魔王著

頁九八〜九九

△中村翫太郎 おれは那の爺さんの顔が好だ——と謂つたら、茶氣滿も大概にしろといふ人があるだらう。だがおれは眞んと此の爺さんの顔が好である。

爺さん、花四天か何かに出て、大勢の大部屋連と一緒に只舞臺に突つ立つてゐるのを見ても、おれは何んといふことはなしに大に悦しくなつて了ふ。顔が剽輕に出來てゐるとか、珍だとか、おつりきだとか、決して／＼其様なふざけた理由ではない。

翫太郎は只一人生残つてゐる道化役者である。これだけでも翫太郎は敬重すべき役者の一人であらうと思はれる。況や役者としては、珍無類の顔の持主である。好が同情となり、同情が敬愛となる。

其の藝の味に就ては、藝風記の方にお譲り申すとして、顔の味に就ては些か愚見を陳じて見たい。

翫太郎の顔は自ら道化役者に出来てゐるのである。と謂つて、翫太郎の顔は、謂ふところの滑稽づらに出来てゐるといふのではない。翫太郎自身の心もちは知らないが、見たところ翫太郎の顔は至極眞面目に出来てゐる。出来てゐると謂つて悪いなら、然ういふ氣分の顔だとしても謂はうか。

左に右翫太郎の顔は眞面目らしい。其の眞面目らしいうちに可笑味の躍動してゐるところが、翫太郎の顔の價値であり有難いところである。翫太郎の顔に眞面目らしいところが無かつたら、あんなに可笑味は無かつたかも知れぬ。

昔の道化役者は、どんなであつてたか、それは知らないが自分等が芝居を見るやうになつてから、死んだ喜知六や、翫太郎のやうに、道化役者らしい道化役者の顔を見たことが無い。

翫太郎の顔は、これを平つたといふと、凸凹面である。おでこで、頬骨が突出して、鼻が殆ど等邊三角形にあぐらをかいて、眼が小さくて、頬から腮にかけて急勾配にずりこけて、しかも其が年と共に尖り立つたといふのだから、そこでこぼこさ加減は正に細工物以上である。もし翫太郎の顔が、もう少し長

いか、さもなければ輪廓が大きいかしたならば、立派にロダンのモデルになり得た人かも知れない。

翫太郎の顔の皺は深く深く刻みこまれてゐる。刻みこまれてゐるといふよりも、浪のやうに、よれたり、うねつたりしてゐると謂つた方が至當であらう。然うして尖つてゐる。然うしてこぼこになつてゐる。普通の眼で見たら、よくもあんな不細工な顔があつたものだと思ふだらう。

成程翫太郎の顔は不細工である。頭抜けて不細工な顔である。そして其の不細工なことが翫太郎の顔の生命となつてゐる。

難しく謂へだ、翫太郎の顔は、極めて自然に出来てゐる人間の手に依つて、細工を加へたといふやうなところが微塵もない。舞臺顔とても然うである。

その眞相は解らないけれども、舞臺で見る翫太郎の顔は翫太郎といふ素の人間其物を見せてゐるやうに思はれる。其の可笑味にしても——眞面目な可笑味にしても、少しもたくむだやうなところもなければ、細工をしたやうなところも無い。翫太郎は毎素顔で、そして毎裸の自分を抛出して舞臺に立つてゐるやうに見受けられる。そして其處に翫太郎といふ役者に無限の面白

味がある。

言葉を変えて、繰返していふ。翫太郎の顔は、荒削の木像のやうな顔である。眞面目な固い難しさうな顔である。そして其の眞面目な固い難しさうなうちに、溢れるやうな可笑味のある顔である。それがまた一層可笑味の度を加へてゐるのだとも謂へる。

愛嬌があるとか、おどけてゐるとかいふのではないが、翫太郎の顔は、見れば見る程珍で、そして可笑味のある顔である。

顔其物か一種の藝術で、此の後此ういふ役者の顔を見ることが出来ないだらう。

翫太郎は、クシャ／＼した、でこぼこな、ひち難しさうな顔を舞臺にさへ出してゐたら、それで立派に一人前の役者として押して行かれる役者である。

翫太郎の顔には、江戸時代の古い歌舞伎の芬^{こぼ}が滲み込むである。翫太郎に取つては、翫太郎の顔が大切な資本で、そして尊い寶である。

演藝畫報 大正四年六月号「樂屋風呂」 川尻清潭

頁百九十

『助六』の中へ出る翫太郎の通人里曉は、當人一世一代の心で大擬りの車輪に勤めて、毎日助六を笑はせる事の形に智恵を絞つて工夫を附け、是を一つの仕事にして居る次第ながら、何分にも病後の舞臺だけに息切れが烈しく、揚幕へ入ると暫時休んで居なければ三階の部屋までは歸られぬ始末を、師匠の歌右衛門が目掛けて、弟子の小役成彌に言付けて、下駄と扇子を持運ぶ附人にしてやつたので、翫太郎は今更に師匠の慈悲を有難く心得、其翌日からは附人を連れて出入をする事になつた所、或日成彌が通人持の扇子を玩弄にして居るのを見て、そんな事されては扇がバチ／＼言はなくなつて役の心持が悪いとて、『オイ扇だけは矢張私が持つ事にしやう、』

●
翫太郎が『助六』の通人に出て、性來の三枚目面と輕妙なおかし味が好評であつた所、是を田舎のお客様から假面を冠つて居るのだと見間違へられた話は、是を前號の樂屋風呂に紹介したのを本人が讀んで、不思議な事がありますね、若い時にも同

じやうな事がありました、それは私が二十五歳の時、芝居を出してから、氣の合つた朋輩と吉原へ遊びに出掛けたのです、其晩の拵へが藍微塵の着附に八反の三尺に唐棧の袷天、氣障氣たつぷりと薄化粧に口紅を差して、まだ罪の深い事には消玉の手拭の頬冠りを横で結んで、のめりの下駄に足の先だけを突掛けて、當人の氣ぢやア五分も隙の無い心持、芝居ですりやア『河内山』の直侍にも見えるつもりで臆面も無く一と廻りしてから、一番仕舞ひに行付けの格子先へ立つと、然も買馴染の女郎が是を見て、アラいやだ、一寸御覽ツてば、アノ素見^{ひやかし}は馬鹿氣た假面を冠つて居るよ。

演藝畫報 大正六年四月号 頁百五十六

中村翫太郎死す。中村翫太郎は、三月十四日に死にました、翫太郎は先代芝翫の弟子で、端敵道役を得意としてゐましたが故實に精通家として有名でした。翫太郎は大酒家でまた大の皮肉家でした。彼は、名題ではあつたが、死ぬまで其披露をしませんでした。翫太郎は本名を中村久太郎といひ、年は六十五だつたといひます。そして、去年歌舞伎に『助六』の出た時、

通人になつて滿都の好劇家を唸らせたのが惜みても餘りある名残りになつてしまひました。

「助六」の歌舞伎座興行は明治三十九年五月から大正四年四月まで十年間行われていない。翫太郎がいつの舞台でこの歌をうたつたかはついに不明である。翫太郎が端役であつたが面白味のある役者であつたことは確かであり、啞蟬坊が何処かでこの歌を聞き演歌に取り入れたことになる。

演藝畫報 大正四年五月号 頁九九から「助六由緑江戸桜型」三浦屋格子先の条がのせてあり、役割から扮装・台本・型まで書いてある。翫太郎の名の有る役割を見ていたどころ。

歌舞伎座四月興行

大正四年 歌舞伎座四月興行

三捕屋移る先陣

遠 爲 春
木 村 錦 花

十年振の助六で歌舞伎座は非常な景氣でした。此次の助六は何年の後か、分別臭い年に成つてから、些か通を振廻したいと云ふ心持で、毎日外から見内から覗いての拾ひ書が、漸とこんな事に成りました。歌右衛門八百藏羽左衛門の三氏に一應見て貰ひ誤謬のない意で居ますが、有つたら御注意を願ひませう。故三木竹二さんの歌舞伎へ出した助六の型が大分爲に成つたので、自分等は三木さんのそゝりを演つて居る様な氣で書きました。然し餘り深入すぎて、冗ばかり多くなつた點は甚く恐縮して居ます。

大正四年四月東京歌舞伎座所演

役 割

肥の意休
實は伊賀平内左衛門

八百藏

白酒屋新兵衛
實は曾我十郎
くわんべら門兵衛
朝顔 仙平
男達釣鐘權兵衛
同半鐘勘八
同半寝狂六

勘五郎改メ

延二 耶
村市 仲改メ
鯉眼 右衛門
三藏 耶

同道手風七
福山のかつき富吉
外真屋藤吉
延國 侍
通人里
廓の若い者

宇之十
新兒 機
門 太
殿 太
永耶 藏耶 勝耶 助耶

まっくらけ節について